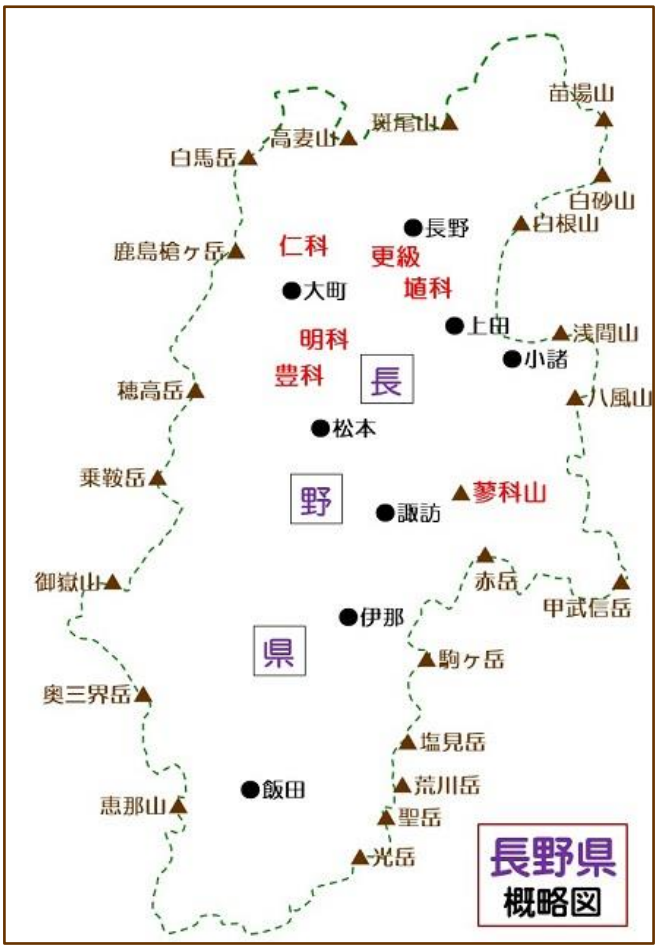
2018.03.13.
T.Kobayashi

信濃の国の不思議なはなし
～地名の由来は面白い～

40 年ほど前に、自分が住んでいる土地のことについて興味を感じて色々読みまくっていた。
ある書籍の中で見つけた、「津田沼」の地名の由来に驚いた。
明治 22 年に「谷津村」「久々田村」「鷺沼村」が中心となって近隣の「藤崎村」「大久保新田」の五ケ村を合併して、中核三村の村名から一文字ずついただいて「津田沼村」とした。
こんなことが解る前は、付近に津田沼という沼でもあったのではないかと想像して古地図を調べまくったりもしたことがあった。
答えが出てしまうと、深い味わいを感じることもあれば、あまりの単純さにがっかりすることもある。

長野県の北部に、蓼科山を筆頭に明科（あかしな）・豊科（とよしな）・埴科（はにしな）・仁科（にしな）など、「科」という文字を含む地名が目立つ。
7 世紀の木簡や古事記にも「科野国」という表記が残されており、信濃の国の由来が「科野（しなの）」であることは確からしい。「科野（しなの）」という地名は「科（しな）の木がある」ところから付いた地名というのが有力らしいが、山国で段差のある地形（級坂：しなさか）が語源だという説もあるようだ。
8 世紀前半になると、国の名を表す表記が「信濃」に代わっており、平安時代末から鎌倉時代にかけての文献には「信州」という呼び名も使われているらしい。
そんな訳で、長野市の「市の木」は「シナノキ」になっている。



「科」の字がつく地名について、少し調べてみることにした。
明科（あかしな）：昭和 30 年に中川手村と東川手村の合併によって誕生した。「赤土の崖状の地形」を意味すると言われている。明科という地名は元々いずれかの村の字として存在したものなのだろうと思うが、充分な情報がなくわからない。松本から篠ノ井線で二駅目、犀川に沿って山の中に入り始めた所なので、赤土の崖は充分に考えられる。
埴科（はにしな）：「埴（はに）」は、赤土の粘土を意味する言葉で、埴科は「埴のある段丘地形（または崖）」を意味する。歴史を紐解くと更級と埴科が、科野評（しなのごおり）を構成する郡だったという記録が残されている。現在では埴科郡という郡名しか残っていない。
仁科（にしな）：松本から大糸線に乗換えて一時間余、後立山連峰を左手に見ながら走ると右手に三つの湖が並ぶようになる。これが仁科三湖と言われる木崎湖・中綱湖・青木湖で、フォッサマグナが生み出した景観のひとつになっている。「仁（に）」は赤土ロームの土を意味し、「仁科」はこの辺りの地形とも関係しているらしい。伊勢神宮御厨の荘官であった仁科氏という豪族が影響力を持っていたとも言われている。

「科」の字が付く地名には、いずれも段丘地・崖地などが絡んでおり平地の少ない国ゆえのことなのだろうと思うが、厳密に読み砕いて見て「科の木」と「段丘地・崖地」との相互の関係性から、それぞれの説の正当性を検証してみないと正解は得られないような気がする。
「科」のつく地名はここで取り上げたもの以外にもまだ存在するが、全部調べてみる時間もないので、登山を通じて馴染みの多い「豊科（とよしな)」について調べてみて、閉幕とすることにした。
松本から大糸線で大町に向かって 20 分ほどで豊科駅に着く。駅を出ると西に北アルプスの山並みを背負い、安曇野と呼ばれる平野が広がるが、なんとこの平野は海抜 600mに近い高さである。
豊科町は平成 17 年に穂高町・堀金村・三郷村・明科町と合併して、安曇野市になった。南安曇郡豊科町と言ったほうが「らしく」て良い。

さらに遡れば、豊科町は明治 7 年に筑摩県安曇郡上鳥羽村・下鳥羽村・吉野村・成相村新田・成相村本村の合併によって誕生した。この村の名前は、鳥羽（とば)・吉野（よしの)・新田（しんでん)・成相（なりあい）の頭文字を集めて「と・よ・し・な（豊科)」とした。
もしも、この時に「な・し・と・よ」と読みあてていたら「梨豊」という地名になっていたかもしれないが、「信濃の国（科の国)」というキーワードが生きて、「豊科」に落ち着いたのだろう。
豊科町誕生の二年後、明治 9 年に筑摩県は長野県に統合された。
歴史を遡って、「シナノキ」か「赤土の崖」か、いずれであろうかと楽しみにしていたのだが、意外な結末に落胆どころか笑ってしまった。

以上